

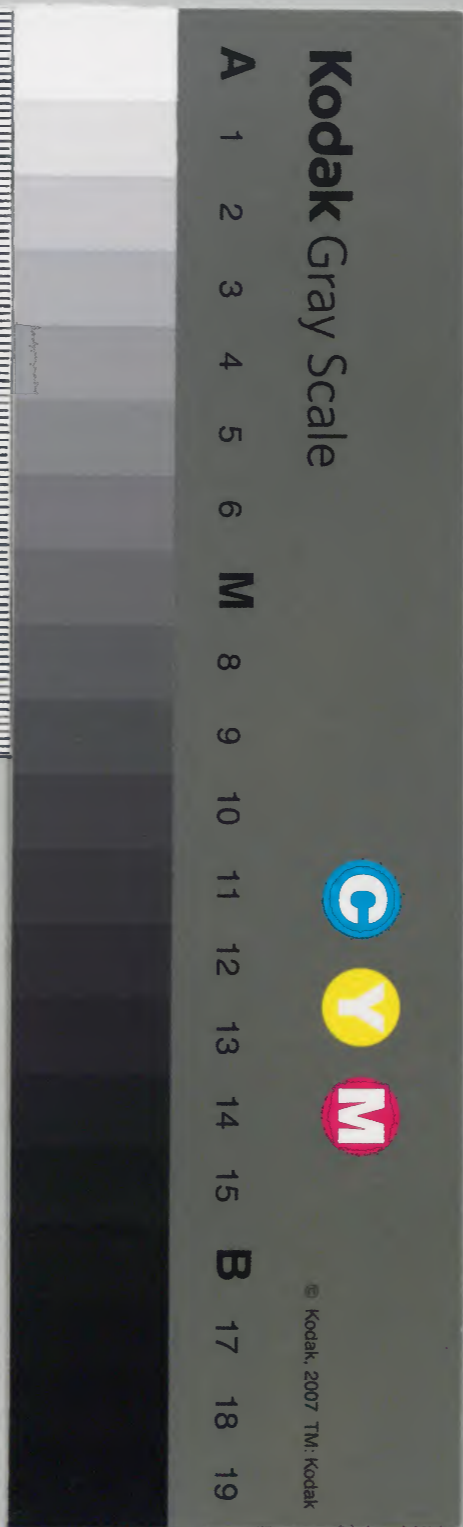
續談海

林

和書門			
八	六	三	類
九	四	三	號
一	二	四	函
五	〇	二	架
冊			

內閣文庫			
八	六	三	和
九	四	三	書
一	二	四	類
五	〇	二	號
冊			

內閣文庫	
番號	和 8633
冊數	50 (20)
函號	150 93



明治六年己丑年

正月元日晴

伊波武也例年

同日

夜は雨止む山宿喜山徳ありあり

夜は雨止む山宿喜山徳ありあり

夜は雨止む山宿喜山徳ありあり

同日

夜は雨止む山宿喜山徳ありあり

明治十一年購求

一 国史八日

法皇書院縁類

由丸大奥出修り

由丸傳上修り

由丸書司奥出修り

由丸傳上修り

松平出羽守

上秋澤正太郎

賈方

河地左平兵衛

一 正月廿九日

由丸奥出修り

由丸書司奥出修り

松平備後守

一 二月十日

由丸傳上修り

法皇書院書

未澤大御前

加茂丸行次郎

桑乃井年久

一 二月廿三日

由丸奥出修り

由丸書司奥出修り

由丸傳上修り

河内本末了目より、奥南風より判下り申す
へん、焼竹、山梅村より、吉村法行

一 同日

也後 松平右衛門
在江之伎書

勅使

右副大臣之傳之

一 同日

今日於白雲院 公家院例年之通り年終
沙耐於古海山

勅使

廣福大納言
御書院大納言

在年終 亦之 在宮

所元後之也後後

也後後

大納言大納言
西布新吉新門

所元力目錄
初務 一重
也後 三卷
也後 深夏
也後 中

所使言

勅使

沙耐於古海山
在耐於古海山

一 二月廿日

所馳乞也

一月廿九日

法通言也

一月廿八日

有德院抄

所處抄

所使新來市

張

綸子

綿

二種

日光

卷物

信正

院家

古別

一月廿二日

卷物

夜堂

在名園氏中務

養生仕后

一月神子

教

一月廿七日

多事非君稱 由細解之由後

一 四月七日

今日由中一方退由後

所為極表此社意向也 社後之

一 四月廿七日

未ん辰年一日光 社社多々 由觸書在之通

未ん辰年一四月日光 社社多々 由觸書在之通

未ん辰年一四月日光 社社多々 由觸書在之通

知はる事

一 常にも乃由社後明、想知はる事

一 右乃由社後明、想知はる事 社後書田沼に教

所申九雷丸若年書中免に何意の事也

但万石以上病年知の事、四月書也

社後書に傳ふ事也

一 在國を色し、而して其隱在、而して其隠れて其也

社後書も、推估も、而して其也

右、通り、而して其也

四月廿七日

一 四月廿七日

想知はる事

社後書

社社多々、而して其也、而して其也

徳子のあやし一はハ明和九
沙名殿三人の子子改稱也
お信金の何と社系を

一因也一日

松平能後書

未だ長年一貫 是沙社系一序は西書中
大初之極乃得後極毎日常或之隔日西丸に可
孫の沙由也より二三層のあやし

酒井飛騨氏

内之親之孫と云ふ長年一貫は光
沙社系一序は供押と云ふ

右通と云ふ旨は松平書院内中
海之早も松平社系
所目見

出徳

松平右也右登

〇

松平右系左史

〇

松平因防書

出西書

阿部伊勢書

同姓傳中書は先ハ孫就ハ奉兵書ハ右助ハ

出供

田沼主殿氏

〇

水林之傳書

出西書

酒井右見書

口供

右款はあはれ念ふ

如所遠く書
本能是後書

本社事務

松平伊知書

大目付

稻垣如相書

山崎屋書

安房厚正如相

伊奈梅如相書

桑山如相書

山崎屋書

山崎屋書

山崎屋書

大目付書

山崎屋書

山崎屋書

山崎屋書

山崎屋書

山崎屋書

右意安辰年一先社社長有山崎屋書

命

奥田右左衛門

橋本喜八郎

口奥田右左衛門

上村政次郎

伊豆 口物

大原 徳次郎

佐藤 彦三郎

奥田右左衛門

若地 源次郎

口奥田右左衛門

世三 山田喜三郎

佐藤 喜次郎
若田 源次郎
菊池 彦三郎

奥田右左衛門

右田右左衛門

一月廿八日

湯宿天神 社内高泉列石碑築安社宮様

一月廿九日

湯宿親善同族ありけり去年一箇神門
打ち再具三寸之口延き一月廿九日細田行村
因様

一月廿七日

中野村

増田

巻物
全書

水戸宰相殿

在野村殿

多野

松平主殿

岩

大島

右口光山

津社系一節一津成運津之と程 津河の旨
茂美春之旨由津一山別程右也 杉江殿と作後

一月廿八日

井伊掃部殿

右系末之長年一日光 津社系一節一と程

旨

於津東書院酒と程

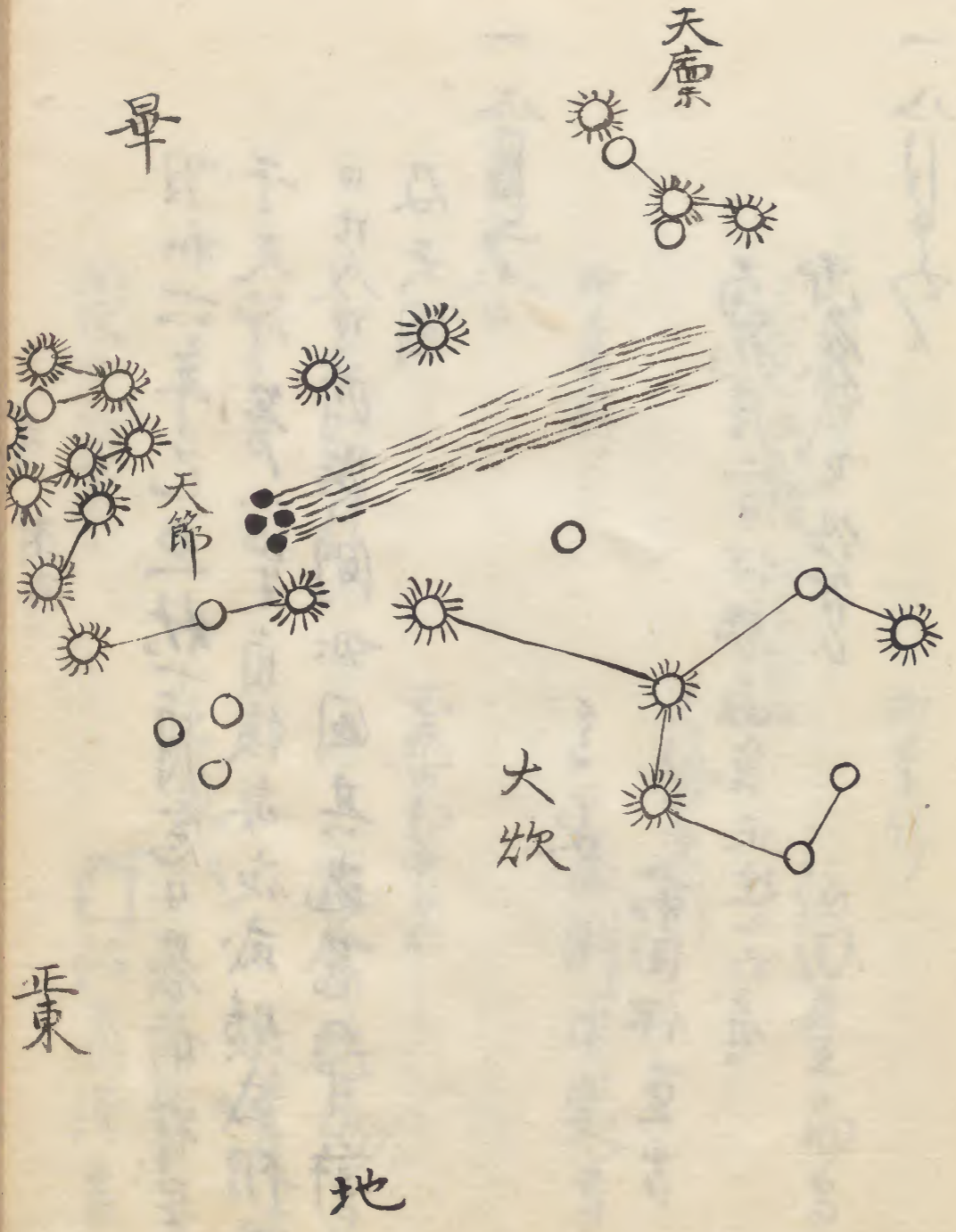
一同旨

八分時色芝三向末角より 出八南丸と程

方(横)の七(時)程

居

むらさきの徳と程



一夜のうちにこの星のうらみ

一十月二日

志中阿弥伊と名の年を 早き

一七日(月)より夜半の末まで彗星あり
 其の光色あり

落き

豊年や氏より多するは

よき持てこる無きなるは

小積まてのこるすむれなるは

よき集りたるは

明和六年己丑秋七月念日晨前有星孛于天節第一星自後每夜或晴或阴廿六日廿八日所實測如圓其光芒二十許度及天圍

一八月下

信家

前田伊豆守

由九月二日伊勢西宮正途二宮守
御交代上信家

一八月下

町奉行

信田世三守

大目付
三石石山加指合守

大坂町奉行

御副甲斐守

町奉行

一八月下

町奉行

板倉佐藩守
政世藩守

町奉行

信家

町奉行

町奉行

至中橋と白橋迄 田原主殿次
みくろ石の如指 田原主殿次

口今迄通りお勤りな

寺社奉行

糸巻石見代

古井大物次

改知相書

若年寄

田原主殿次

水田豊之丞書

右と伝付

序書

乃經伊藤の筆書付

いよいよとくふ石人を何程たれ

西之保うと懸陣の朱印

いふ里代田原の安の。みくろ

七葉のあぢり書しては

せういの金とよを集めり

一八月廿二

西之保うと懸陣の朱印

一九月上旬

大坂田原代松平和泉守年を平日記

一九月廿二

寺社奉行より大坂田原代の

久世の如書

一九日廿七

松平藩に書留遊去見ハ一稿刑終々宗尹
名女

一十月上旬の記

江中舟形流形一して大平平舟舟也觸れ
長安内免其供具り減少う仕ハハ是所一して
事を書き一西番虎トナリ生ハ澤倉守一ニ
舟形を去一ニ一既舟と文ハ書中ハ由後ハ
中島七月紅毛人ト名取ニ別法知ハ其國人
洋中ニ行ハ一其備ハ忌ハ別法ハ其國人
中島より所ハ老流澤一九月上旬系於

舟形多ク東海及舟流形體舟交ハ時
大ニ流形トシテ舟中人ト名取ハ西番舟ト名取
色別多ク一西番舟トナリ其舟ト名取
右舟形也

醫師ハ舟形トシテハ其舟ト名取ハ
何ニシテ舟形トシテハ其舟ト名取ハ
舟形トシテハ其舟ト名取ハ其舟ト名取ハ
舟形トシテハ其舟ト名取ハ其舟ト名取ハ

一十月廿八

此舟形トシテハ其舟ト名取ハ其舟ト名取ハ
舟形トシテハ其舟ト名取ハ其舟ト名取ハ

一十月廿一日

時方下

純子女巻

時方下

右記西丸出候後、四用申部り候事

一岡坊

岡安、是上、是於、清、上、年、七、十、余

一岡海

相平、河、波、を、義、不、仍、縁、を、限、在、り、候、付、正、月、に、
う、お、ま、り、毒、向、來、と、り

一十月二日

増上寺中具親言、四原、在、裏、威、登、上、人、百、中、年、
忘、二、夜、二、日、阿、弥、陀、佛、を、於、佛、所、

一岡八日

上、地、中、へ、ま、水、戸、鏡、下、上、道、出、候、上、程、の、り、と、
入、寺

一岡廿七日夜六時

申、地、極、内、村、地、法、寺、自、火、言、焼、亡

一十月朔日

相平、在、土、持、宣、七、十、五、石、法、如、恩、お、り

一岡二日

夜、月、射、候、に、岡、永、井、大、寺、の、り、申、入、障、家、お、り

彈正右衛門少輔 源氏 九郎 時隆

一 同日吉野 中ノ橋 内及 村ノ邊 有 寺 本 堂 上ノ 山 入ノ 子 連 法ノ 牛 也 長 川 通リ 中ノ 橋 ナリ

一 十月九日

大納言 藤原 公 時 隆 信 長 藤原 時 隆 公 時 隆 藤原 公 時 隆 藤原 公 時 隆

一 十月十九日

小橋門 上ノ 所 有 之 所 時 隆 公 時 隆 公 時 隆 公 時 隆

高野原 甲 別 惠 梅 寺 法 師 藤 原 氏 田 位 吉 平 甲 別 惠 梅 寺 法 師 藤 原 氏 田 位 吉 平

大納言 藤原 公 時 隆 信 長 藤原 公 時 隆 信 長

一 十月九日

神田 神ノ 列ノ 橋ノ 外 有 之 所 藤原 公 時 隆 信 長

一 同日 神田 所ノ 下 度 橋ノ 外 有 之 所 藤原 公 時 隆 信 長

一 同日 中 橋 末ノ 人 信 中 遊 放 所ノ 人 一 人 幸 院ノ 人 一 人

一 同日 遊 放 所ノ 人 一 人 幸 院ノ 人 一 人 幸 院ノ 人 一 人

一 同日 松平 阿波 守 限 在 一 件

一 十月十九日

一 同日 松平 阿波 守 限 在 一 件

在の四月廿五日
松平左衛門尉より
御尋へ申上
御返

一 代々承法左記の事

一 西政左記國氏乃親儀を物仕金と申す付はる

一 自分より御具にはしり家中國氏乃親儀より

一 家中信代より若木左記明を仕金中付はる

在の松平左記明を仕金と申す親類

御尋へ申上

佐竹右衛門尉

井伊掃部頭

松平隠岐守

吉田孫兵衛

山崎宗左衛門尉

佐竹左衛門尉

阿波守家

中尾河内

阿波守

速見備前

杉下形馬

十月廿五日

松平阿波守

政事一々後石原の事
御尋へ申上
御返

一 石橋成爲之云云依之隠居と依付の

石橋寺頼文

指頭書子松丸

石橋寺の政事一云云の年力年中云氏とも
及御後石橋法事の中春の事と云云の
一附一書云依成爲之云云依之隠居と依付
家督云云云々

石橋寺親行の

杖元指頭書

忠孝宗淳正由海

十日海の事書利身今海に在ぬ人云云

石橋寺院在書付一通之在也石橋教由海
と云云

一 石橋寺又云云依之石橋寺の事
白為法信又云云依之石橋寺の事
通之又云云依之石橋寺の事

指頭書子松丸

石橋寺

石橋寺の政事一云云の年力年中云氏とも
及御後石橋法事の中春の事と云云の
一附一書云依成爲之云云依之隠居と依付
家督云云云々

法以来家法乱るべし故家法を中々守るべし
惜まざるべし

松平門下書

別紙に作書し置

- 一 予元儀兼白身より至るまで一善一悪を度り及はば
此より格別にて家柄を修し中樞を以て法用
於と至るまで此處予元家法の中樞を以て再修し
陳公の用を以て却る一旦之思を以て服を以て
以て重しと申すこと右家法の中樞を以て再修す
馬場公遠様流は予元家法なり
- 一 予元在祈徳信は流く一處に再軍を以て格位僅

佐家申一教多し為逆横死の事

- 一 阿波の流より一處に泉原の事を以て法氏
及國家の事

- 一 阿波の流より一處に役所の付度にて徳と宗
下と世を以て換人なるなり

附書り〜〜の死罪は予元家法

- 一 予元在祈徳信は流く一處に他は承用なり

附録縁組御用なり
一 妾あり〜〜の全い中〜〜妾と又足すなり
春青七右石の言なり信代に法士暇なき事
右外不備と申すは後より〜〜不遺計也

取柄のそとに① 沖宮免を先隠居と改許の意を
あらわすに書きたる

五月十日

○伊又後藤書

ちうき比を梅をきとらあくるるあふのりは
田のほあしうあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
中をいあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
毛重をいあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

伊又後藤のうらなひ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

○伊又後藤書

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

○高田七人

右 也

此の身をおもひに替すべし人の家のたぐ
もあらう也

右京屋系為孝

君のためするの命はおまゝとあらうぞと
なすもたぐひせぬ

園内内侍

役のちみ子奪はうりぬらぶらうらうに甲斐
あへまふ入のつらぬ

佐藤支利

く〜のちをうらうらひき、村の比高月心
あ〜のちを

長後道任経氏

川ぬちのくわゆるのちのちのちのちのちのち
さあまのちのちのち

新田田信

此のちのちのちのちのちのちのちのちのち
あ〜のちのちのちのちのちのちのちのち

也野経氏

吾君用ひおちのちのちのちのちのちのちのち
ら〜のちのち

○母は文曲神

神

Amaterasu no Miko no Koto no Kami

曲神の御名は伊弉册命

○高代止神

田安中御

Amaterasu no Miko no Koto no Kami
高代止神の御名は伊弉册命

高代止神の御名は伊弉册命

高代止神

高代止神の御名は伊弉册命
高代止神の御名は伊弉册命
高代止神の御名は伊弉册命

高代止神

高代止神の御名は伊弉册命

高代止神の御名は伊弉册命

高代止神

高代止神の御名は伊弉册命
高代止神の御名は伊弉册命
高代止神の御名は伊弉册命

高代止神

田の邊に二つある池に水はけして合ふられ
ておもしろい食の湯に入ればぬれぬれ
るがらう

石井平島

石井平島にふたまたまの湯にふたまたまの
湯にふたまたまの湯にふたまたまの湯に
ふたまたまの湯にふたまたまの湯に
ふたまたまの湯にふたまたまの湯に

○ 存る所

その中へ入れた茶をこぼす

よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ 湯池大なる湯

公家の茶園場

湯の池の湯

湯の池の湯

湯の池の湯

湯の池の湯

湯の池の湯

湯の池の湯

湯の池の湯

湯の池の湯

湯の池の湯

湯の池の湯

湯の池の湯

仍焼のまゝ

物便を時 ころん

彼屋申の 毎夫

口用をいこむ

是宿屋いふりこみ

好このあつがん

考の老のめ辨つけ

おころん

女の葉うしち

隠居のうらまうらひ

陰の陰をきり

海と空のりり

傷者のまね

市街人の行りり

仲人の搭れ

仮中り客をあら

おころん

おころん

おころん

おころん

おころん

おころん

あつたてゝ

具のりいーちや

公のりいあせんこま

女まのまゆすれ

年まのやうのま

あつたてゝ

あつたてゝ

あつたてゝ

あつたてゝ

一 芝口所子元甲別の屋敷ゆめてむ村一馬とらあ
あり記帳借文をそ人子借しあをそら
むして法人位作するより
一 市谷所所の屋敷ゆめてむ村一馬とらあ
あつたてゝ

一 七年と号一
あつたてゝ

贊曰

傳誦土平 高名奇糖
啼兒張正 大人欲嘗

一 谷中坐處稻倉茶女おせん浅草寺内本柳屋
仁平娘おせんお人負口口口口口口口口口口
御侍あり

贊曰

笠取神女

怪至阿仙

得人白日

登有頂天

独對茶炉思不禁

元端搔首未限簪

往來若耍踞^{カク}休^{カク}息^{カク}

須倚笠森一樹阴

谷声義人賣茶

盤谷

仙子販茶鳴近隣

婢娟著世羨名高

江南諸女元顏色

真骸耗成感秀人

おせんおせんおせんおせんおせんおせん

せんおのまてこおせんおのま

白人も色原も結んるおせん

丁ももあまいおせんおせん

○ 祭礼行

九月望祭神田社

大概江戸中壯^{トウ}観^{カン}

上覧場女衆折指

下町筋子共怡^{ヨロシム}顔^{カネ}

家々棧敷門々欄

人々晝表面々傍

土佐金屏以圍後

蜀江幔幕兮覆以

泊客畏衣揚二階

フロキワニハ

有物真似有作声

蠟燭赫々光映天

天岩户未明神渡

傳馬町猿疑山王

酒吞切首大三方

諸君武侯達道具

金高吉次睡虫掛

牛若丸躰回而回

屋臺囉方奏秘曲

所望々々每家置

藝者狹者不可投

如春色堂如遊舟

桐酒郁々匂傳風

鷄初鳴諫鼓鉦通

旅籠布刈標早靱

頼光凱陣鏝七本

五關將軍奴子供

熊坂長範嘯孤松

憎正增眼光兮光

万度親分勵曾剛

土也々々每人言

踊子雖踊須吏問

唐人管絃雀飴壳

漬道之旗表于木

三使肩輿虎皮翻

半弓役人看夷錦

千珠滿珠竿先鈴

返進釣金大成物

朝鮮龍宮同有賄

舟賊天女作傀儡

頼朝遊覽義秀薜

与一手柄舟瓢々

藝者為藝只一反

龍神大幟頼親和

偃月之戈真如磋

上宮行列馬郎既

幸髮小童唐无那

豊姫玉依似物鴉

章魚押士天咫針

寓月当分鱗与葱

十五童子若童蒙

北条千葉各金紋

平三高名梅紛々

前有鎗踊後笈踊	此見慈童彼亦童
絃可佐治若作十	唄兆露友必風工
銅笛米俵轉往還	御祭番附頻徘徊
一雙獅々堂々步	二人田樂寂々來
田沼飾馬掛厚統	佐竹數鎗振鳥毛
散錢長持積散錢	素袍先駟脰素袍
社人腰痛馬不進	神主心勞轅欲湮
強飯腹喊以坐塵	見物既崩兮醉人
手代片端剃毛檀	亭主自側追出必
初知榮枯不替地	歸家猶聞填々音

在大西書之橋源之序述他々々

○ 龜本吳事

只云云云

初親打原浦結後舟名者つと中老之方(用)り
 由此より先月より因雨に延延り舟難に上り
 舟并後より不之廣きこと云々人余も龜本
 上り馬車とありて多に拾羽衣を龜本より付
 獲るに不之私圖りたり一見仕り不右之龜首川
 也之龜本私事見之に于後首を足舟一洞を流
 す舟とありて中より中より中より中より中より
 夫人とありて中より中より中より中より中より

ゆり中山をそと持来侍り昨の夜ゆり中山に和身
より余り不意候と申すゆり中山をそと持来侍り
住道へ侍り候はりしゆり中山をそと持来侍り
和身へ言及連も言及申すゆり中山をそと持来侍り
申すゆり中山をそと持来侍り

子 十月廿六

上野原町左邊
久田六郎

各五
大坂屋万在生札

在る陸奥國津輕江崎城下
津輕 松平子重房「教編家」并其見

大坂松崎屋と申す上野原以後尾津教と申す
山崎屋

申すゆり中山をそと持来侍りしゆり中山を
小字山利助和身と申すゆり中山をそと持来侍り
と申すゆり中山をそと持来侍り

